



シャガシ

原田 久

先日、友人の家へ風呂をもらいに行ったら、そこのお祖父さんが青竹を二本並べて鋸切りを使っている。何を作るんですかと聞いたら「孫にシャガシを」との返事であった。シャガシ、そのヒビキの何と耳に懐しく、嬉しかったことか。シャガシとは八代の古い方言で竹馬のことである。このシャガシに乗った少年を見ることがめったにないし、このシャガシという言葉を知っている少年もほとんどいないのではなからうか。

さる三九年の初冬に東京上野文化会館で新鋭作曲歌のグループに依る意欲に満ちた新作の発表会が催された。その発表会に八代出身の福島雄次郎（神奈川県在住）が八代方言に依る純粹歌曲集を発表して異常な反響を呼んだ。その模様を私はRKKの録音テープで聞くことが出来た。その反響を一言に集約すると「おどろき」である。東北地方のズーゾー弁

が、正義も通りにくいのが普通と思われる。所で裁判所を覗いて見よう。境界モメの調停中、女の調停委員さん、インターらしく余りテキパキは出来ないが、ムード作りには大いに効あり。美しいな。日本アルプスの雪、夏山とて油断禁物。ガタガタ揺れてるのは松代だろ。

久界米の美術センター、バラの花盛りだ。絵をみたり、やきものを賞でたり、これらはまだ金持階級の楽しみかな。もつとも、貧乏でも、本当に分っている人と、そうでなくて「よい御趣味で。」と人にいわれたい御方もいらっしやる。カラヤンの音楽会だって案外着物みせに御出かけの—私のヒガミかしら。

阿蘇の山に馬がはねている。何でもひもがついてないと奔放な活動が出来るからいい。蟻の行列と同じなのはデモ行進とやら。

桃の木のある小さな家、どこかの奥さんがしゃべっている。買物の苦情だ。応待していたおばさんが書類を作って熊本市渡鹿の赤いポストに入れた。今日は五月雨を降らせてあるので、さだかではないが例のおばさんが、中央街のレストラソに入って行った。若い給仕さんに話しかけている。「仕事楽しい？この間のボーイフレンドとおつきあい如何？」おせつかいな、年だな。でも、婦人少年室協働員という身分証明もつてるから、仕事だろ。それにしても、あの世話焼

や、舌なめらかな関西弁は今や日本中何処へ行っても耳なれた言葉であるが、アクセントの強い特異な発音をもった八代弁が、晴れがましいステージで、一流のソプラノ歌手によって歌われた時、聴衆は先づこれでも日本語の内かと驚き、その次にもっと言いようのない不思議なものを肌で感じたのではないかと思う。その肌で感じた不思議なものの中には、きつと遠い故里のにおいが混っていたはずである。RKK放送記者のインタビューに答えて、ある画学生は「現在の日本、いや世界中の国々から失なわれて行くもの、それはローカル臭である。そして今吾々が一番欲しいもの、それは歪みのない純粹で強烈なローカル臭である」この言葉を聞いた時、なるほどそうだなと私はおもった。そして作曲者の奴め、そんな処までマークして私に方言詩を書かせたのかと苦笑したのだが、その次のインタビューに在京三五年という八代出身と名乗るお年寄りの声を聞いて、なにかしらほっとするものを感じたのである。「シャガシ（竹馬）とか、ジュッカー（水溜り）とか古い八代弁が耳に響いた時、おもわず涙がこみ上げて来ました。私はこんなにも懐しい故里の言葉を完全に忘れていたのです」

作曲家の福島から純粹な八代弁（はなし言葉）に依る作詩の依頼を受けた時、私は時代の変遷にいやおうなしに押し流され、変容し、亡びてゆく古い八代と、

き婆さんお金があればもつといいだろうに。もし百万円が入ったらどうするかしら。オールドファッションの服をかなぐり捨てたからって、さしたる変化も望めそうにないな。では一寸、金の半をたらして見ようか。音もなく、彼女の睡眠中の顔に。翌朝鏡を見てびっくり。「私生まれてはじめて美人になったわ。」欣喜雀躍、彼女はいうだろう。「もう二〇年早かったら。」

おや、通産省商工課長とかいた封書が着いた。「先日の苦情、熊本商工会議所あて連絡完了よろしく。」お役人様も大分親切になって下さったので一安心。下へ降りることにしよう。

胡瓜も肌着も下宿代も皆高い。空想の世界にでも旅行して英気と鋭気を養わなれと思がつまりそうな現世だ。思いあがり世話焼きはあさん、時々好きな花でも活けながら、動きまわることにしよ。

野出にて

福島次郎

「おい」と声をかけたが返事がない。例の草枕にでてる茶屋は、現在の金峰山のあがり口にある「峠の茶屋」ではなく、更上の野出の峠にあった茶屋だったと言う。いつか私は、玉名の横島から、この峠を越えて熊本へ歩いて帰ってきた事があったが、その時も、この辺

懐しい八代弁の一つ一つに、私達の少年時代のノスタルジーをおりませて、私達の墓碑を建てるつもりで筆を執ったのだ。

話は変わるが、昨四〇年四月、一方的公示に依って八代の古い町名が変更された。「何町何丁目何番何号」まるでキーパンチで穴開けされたような味気ない緑の金属板が私の表札の隣りに釘打ちされているのを見て、あっけにとられた。△私の家はたしか湖原にあったはずなのに▽

私は、後ばかり振り返って消え去った過去のにおいや陰影にのみ恋々と息づいているガンメイコロウな亡者の人間ではないつもりである。しかし私達の少年時代から青春の一時期までの豊かで、すなおな心情を育んでくれたさぼんの花の香気のような、ローカル臭豊かな古きよきものが近代化の美名のもとに無残にも破壊されたり、消滅したりしてゆく姿を見ると堪えがたい悲しみが湧き起るのである。（詩人）

星町滞在二週間

本田たえ子

五月雨とか五月闇とか、この季の語はどれも湿っぽい響きをもつ中で五月晴だけは爽快だ。けれどこれまた雨の時間を指すのであって、五月山と共に陰うつなおしめりに関係がある。ことに五月の

だろうか、あの辺かと、胸推量して来たものだった。今度、後藤是山先生の東火社と、野出村地元の人々との合力で、その記念碑が建った。除幕式は五月五日だった。私は東火の一員でもあるが、とくに野出の現地で、という事に惹かれて出席する気になった。観光地とか公園とか、人の目につく所に、無闇と碑をたてて喜んでるのは違う気がしたので。

その日は快晴で、私は本妙寺から歩き出した。山道の両わきに重なり合う樹木の青葉が、歓声あげて生気を吐きだしているようで、トラックの埃りをかぶり、汗を流しながらも、私は来てよかったと思つた。天地の緑を自分が吸っているつもりで、狐の自分が緑から吸われている感じでもあった。一分おきに車が砂塵をまきあげて去る。草枕時代の山道登りはさぞよかつたらうと羨ましい。

一時間で、所謂「峠の茶屋」に着き、一休みしていると、恰度池田隆藏先生の車が来たので、野出まで歩きおおせる意気込みが、ここで崩れてしまった。そこから車で三十分もかかった。「又、えらい山の中でするもんじゃある」と池田先生。

その峠の茶屋跡というのは、私が山越えの際見つけていた所とは又違う、ずっと上方の、奥まった部分であった。その茶屋もとけて、三十坪ほどの畑となっていて、その前の幅一米のほど道（これ

夜空ともなれば仰ぎみる人も少ないだろう。秋の清澄な空気の中にときすました理智の光りを放つ星もいけれど、私はようやく暮れた若葉の黒い茂りの彼方に遠慮がちな暗い瞬きを見るのが大好きである。こんな星と語りながら、ふとたわむれた私の「星町滞在下界視見記」

NHKのテレビ塔と熊本城に渡された見えない橋を私が真中まで行った時、逆に反りかえった反動でポーンと空へ。私は星の衣をきる。下界は連休。女房子供孝行のババさん、温泉旅行はさぞおつかれでしょう。若い女性の方と、膝上一〇歳のスカートが流行ならば、電車に乗った時位小僧さんの顔を揃えた方がカッコいいですよ。おや御見合いだ。男モジモジが最近の傾向、でも選ぶ方はやっぱり男性、結婚して古くなればなる程家事に細やかな女を重宝がくるに、見合い当座は何が何でも飾り物みたいな美人を熱望する人が多い。

今朝のテレビがよく見えた。女性のO型と男性のAB型が結婚すれば必ずといっていい位脳性小児マヒの子供が出来るそうなの、現代人はその血液不適合とかいう事まで考慮に入れる必要があるらしい。でも骨まで愛していれば、その御心配御無用、交換技術の進展によって愛の結果も育つという話、そうそうベトナムでは、国の経済政策を乱した罪によって公開殺人が行なわれた。人間世界はうるさくてこわい所だ。慾の深い人も多い

がかったの唯一の峠道だったそうだが、今ではすぐ下に大きい新道が出来ているので、まるで崖上の人家の庭さきのような感じになってしまっている。もセメントで塗りつぶされてあった。が、見晴しは素晴らしい、右手の下の山脈の彼方に島原がかすんで見え、左手のすぐ手元に金峰山が、恰度阿蘇の米塚ほどの感じ（憎々しさが消えて小さく、なるほど漱石が言ったようにバケツをさかさにしたように）で見え、ここぞ草枕の峠だと納得出来た。若き日の漱石が通った往事の石ころの細道は、村民の農のための裏道にすぎない形で、山頂、山腹、山峽を上ったり下ったりして続いているのが、遠くまで眺められたが、そういう気分でひと山離れてふりかえると、そこが高みの突き出た部分となつて宙にうき、いかに昔の峠茶屋にふさわしい場所であった。除幕式がはじまる頃、山の畑から村人達がぞろぞろ下りてきた。「夏目漱石ちゆうは何か知らんが、ここは一遍通っただけで、こやん大騒ぎするちゆうは、どぎやんえらんか人間だっただろか」そんな高声が聞えた。

碑が立ち、街から大勢の人が集り、身長以下改まった装いをし、テレビのカメラマンが動くといった事は、この野出村には、めったにない賑やかな日だったかもしれない。（八代工業高校教師）